

指扇小だより

教育目標 やり抜く子の育成

かしこく やさしく たくましく あたたかく

令和8年9月30日 第7号

さいたま市立指扇小学校

〒331-0078

さいたま市西区西大宮1丁目49-6

電話 048-623-0133 FAX 048-624-2200

<https://sashiogi-e.saitama-city.ed.jp>

「読む」という体験

校長 小松 伸弘



校長室前の本紹介コーナー

連日の大雨が収まり、ようやく天高い秋空が見られるようになってきました。先日は授業参観・懇談会に御参加いただき、ありがとうございました。一学期より少し成長した子どもたちの姿を見ていただけたかと思います。

さて、本校の学校図書館では、図書ボランティアの皆様が、読み聞かせや掲示物の工夫など、子どもたちが本に親しむ環境づくりに日々御尽力くださっています。季節ごとに変わる飾り

や本の紹介コーナーには、思わず足を止めたくなる温かさがあります。

読書には「疑似体験」と言える働きがあると言われています。脳の研究によると、物語を読んでいるとき、人はただ文字を追うのではなく、場面や出来事を頭の中で再現していることが分かっています。つまり、体験していない出来事も、物語を読むことで体験できるということです。現実の生活で出会える体験には限りがありますが、本の中では無限の立場や状況に触れることができるのです。さらに読書は、まだ出会っていない誰かの人生をたどりながら、共感力を静かに育ててくれます。登場人物の気持ちを想像しながら読み進める中で、多様な喜怒哀楽と出会い、そこから生まれた新たな気持ちが、子どもの心を揺さぶり、育ててくれます。

児童文学研究者である守屋慶子氏は、子どもの絵本の捉え方について、年齢ごとの違いを比較しています。シルヴァスタインの「大きな木」という、少年と木の交流を描いた絵本についての感想を比べるのですが、小さな子は「こんな木があったらいいな」と感じますが、少し成長すると「木がしゃべるはずがない」と現実を見るようになり、やがて「少年はわがままだ」とか「これは親子の話だ」と抽象的に物事をとらえるようになります。ページをめくる時間の中で、子どもたちは日常とは異なる世界に触れ、自らの視野を広げます。それと同時に、時間を経て再び同じ本を手にとったときに、自分自身の心の成長に気付かされることもあるかもしれません。

ところで心理学者の河合隼雄氏によると、本を読む子どもを育てるためには、ただ「本を読みなさい」というより、周りの大人が本を読んでいる環境があると効果的だそうです。私たち大人が読書を楽しみ、ときには隠れて本を読むほど夢中になっていると、子どもはかえって「なんだろう、自分も読んでみたいな」と思うようになるのだとか。その言葉を信じて、最近は私も児童書を読み、校長室前で子どもたちに紹介しています。

10月27日から「読書週間」が始まります。学校図書館でのひと時や御家庭での読書の時間が、子どもたちにとって新しい世界、新しい自分との出会いとなることを願っています。

(参考:「子どもとファンタジー」守屋慶子 新曜社 1994)